

魅力あふれる学校づくりを目指して

連載 69 「德育×SDGsで未来を育む教育を」  
学校法人誠心学園  
浜松開誠館中学校・高等学校 校長 高橋 千広

誠心学園浜松開誠館中学校・高等学校は、変化化する社会に対応できる人材の育成を目指しています。

◆建学の精神

大正13年4月、創立者である長谷川鉄雄により開校した誠心高等女学校の建学の精神は「師弟が温かい家族的情緒で結び合い、誠実にかつ常識に富み、社会人として有為な婦人を養成する」というものでした。

その後、中高一貫化・男女共学化を契機として、平成10年4月に校名を新たに「スタート」を切った浜松開誠館中学校・高等学校は、理事長高林一文が創立者長谷川鉄雄の意思を継承し、建学の精神を「豊かな人間性と自己表現の能力を育て、知性・道徳性・感受性の調和した人間教育を軸に、誠実で常識に富み、男女共同参画社会へ寄与する生徒を育成する」としました。

◆教育理念「学校は楽しく学ぶ場」

学校は楽しく学ぶ場であることが極めて重要です。学校生活の3年、6年間は短い期間ですが、思春期、青春

は人間形成において精神・知能・身体がまた磨かれる時でもあります。

学ぶ場は、和やかで無限の友情が広がる空間要素を持ち、創造力と美的感覚を育む環境が必須となります。そして、教員は一人ひとりの生徒と向き合い、個性を生かし、才能を磨く役割と

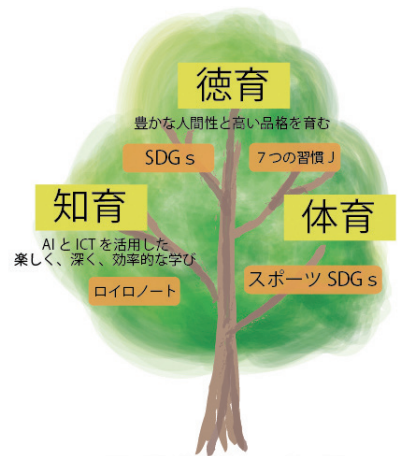
人格・品格を備えた人間性豊かな生徒の育成を使命とし、教育指導に励みます。

◆教育方針「やる気と目標を育めば、輝く未来は必ず見つかる」

浜松開誠館「みのりの樹」は若樹から成木、さらに未来は大樹となる力を育むことを表しており、本校の教育方針「未来を育む教育」です。

成長盛んな若樹「みのりの樹」を生徒と捉え、「K-i-c-o-m-p-a-s-s」(注1)、「7つの習慣J」(注2)などの教育を枝葉を支える一番大事な幹として、德育を行うことでたくましく太らせませす。

この教育が将来大樹になる人間を育てる德育であり、心を豊かにして、教養と人格・品格を備える人間形成に繋がると考えています。德育の成果によ



みのりの樹のイメージ

◆未来に向けての責任のある教育  
・主体性の育み

現代社会の課題は、日本だけで解決できないものがほとんどです。未来をたくましく生きていくために、主体的に学ぶことが大切といわれますが、今の子どもたちは、与えられた日本の教育の枠の中で学んでいると感じます。

また、子どもが失敗をしないように先回りして手を貸す大人の姿があります。しかし、そのような環境で育った子どもは、進学や就職で急に「自分の責任で決めなさい。」と言われても、戸惑い自己決定ができません。全員に「イノベーションを起こすような積極性と強い決断力を持ちなさい」とは言いませんが、その子なりの特徴に合った場所、自信を持って居場所をつくり、どんな時代も乗り越えていける子どもを育てていくことが必要だと考えます。そこで、本校では主体性を大切にしています。

「自ら学ぶ」、「個別最適化」などの先進的教育へ向かうことになった契機が、令和元年に行った「気候マーチ」でした。グローバルコースの生徒が授業で地球環境の危機を知り、生徒会や部活動と協力して、約400人の生徒が市内を進行しました。

その活動を成し遂げた結果、生徒たちの自己肯定感も高まり、フードロスやランドセル回収などさまざまなことに、主体的に取り組むようになりまし



グローバル気候マーチ

た。また、学校としては、環境作りなどを始め、どのように後押しするかを考えるきっかけにもなりました。

また、理事長が未来戦略を発表し、早い時期にタブレット型端末などICTをいち早く導入したこともあり、生徒たちは、環境に関する課題としてオンライン対談を活用しています。

対談に応じてくれた当時の環境大臣をはじめ、多くの大人たちに助けられ、課題解決へ一歩進んだことを実感するとともに、大人への信頼感が芽生えてきました。特に令和2年の「環境白書」(21頁)にも掲載されたことは、大きな自信になりました。

自分なりの興味を持ち、いろいろな大人と出会い、小さな一歩を踏み出して新たな発見をすることは、主体的な学びにつながり、日々の学習に大いに

役立ちます。

「マナビング」も特長の一つで、主体的に考えることを中心とした校内予備校です。本校の卒業生である大学生がチューターとして生徒の相談に乗ってくれるなど、安心感があり、それが自主的な学習を促しています。

・教育のなかのSDGs

グローバル化や気候危機、少子高齢化、コロナ禍など、社会が大きく変化する中で、学校教育にも変化に対応した「新しい学び」が求められています。

中学校、高等学校での学びは、社会に出た時に大きな意味を持ちます。生徒には「まず世の中を知ること。そして自分がどういう人間かを知らなければならぬ」と伝えていきます。世の中を知り、自分に何ができるかを考える一番のきっかけになるのが、SDGs(持続可能な開発目標)17の目標です。

本校では中学生の3年間で「Kompass」を使い、発表会のプレゼンテーション、環境問題授業と連動した活動、生徒自らが教員役となつて他の生徒に授業を行うなどの活動を通じて、SDGsについて学んでいきます。

そして、高校生の3年間で「7つの習慣J」を使い、SDGsについて、「自分に何ができるのか」、「どんな未来にしていきたいのか。」を考え、実践する活動を行っています。

本校が柱とする「徳育」のベースは「自分のことだけでなく、人のことを考えられる」、「(社会の課題などを)自分のこととして捉えられるようになること」です。そうしたことに入学から取り組んでいたからこそ、SDGsの取り組みにも自然となじめたのではないかと思います。

・生徒の心を開く

理事長や校長は雲の上の人であり、先生に意見は言えないという固定観念を取り払い、生徒が心を開き自分の考えを言えることが大切だと考えています。心を開かせることで目が輝き、人生を真剣に考えるようになります。

最近では、生徒会役員が生徒たちの意見を集約し校則の改正についてのプレゼンテーションを理事長、校長に行い、いくつかの自由を獲得しています。このような生徒が増えてきていることを誇りに思いますし、彼らは未来への希望です。

子どもたちには、無限の可能性があります。

自分で「能力はこれぐらい」と決めてつけている枠を取り払って、可能性を見出せる、自分を肯定できる生徒たちを育てたいと考えています。

本校では生徒・保護者・教員が一体となつて校内の清掃を行う「学校クリーン作戦」を実施するほか、「開誠館あいさつルール」を定めて時・場所・



アリーナIIで部活動に励む生徒

状況に応じた礼儀正しいあいさつに取り組み、徳育に努めています。ここにSDGsを掛け合わせて、今の日本に必要とされている「課題解決型」の学習を加え、グローバル化する社会の中で、国内外でより素晴らしいと感じてもらえる教育を実現していきたいと考えています。

◆◆◆寄稿者紹介◆◆◆

平成30年4月 浜松開誠館中学校校長就任  
平成31年4月 浜松開誠館中学校・高等学校 校長就任